

令和4年度の農業を振り返る

稲作

令和4年産の水稲の作況指数(秋田中央部)は「94」の不良となり、平成30年産の「96」以来、平年を下回る大不作となりました。また、異常気象下のなかで品質への影響もあり、1等米比率は86.2%となりました。

各生育ステージでの生育状況を振り返ります。

【播種～育苗期】



水稲の育苗における始期は4月12日から、盛期は17日頃、終期は25日頃でした。播種後は気温が高く日照時間が平年を上回る日が多かったことから、生育は良好でした。後半になると例年より急激に「苗立枯細菌病」や「もみ枯細菌病」が多く確認され、薬剤散布や早めの田植えなどによって対応しました。全体的には出芽および苗の生育は概ね良好でした。

また、耕起作業は平年並みに作業を終えることができました。

【田植え～生育初期】

田植えは早いところで5月10日頃から始まり、終期は25日頃となりました。気温も徐々に高く推移し、比較的好天のなかでの田植えとなりました。一方、6月に入り急激な気温の低下から初期生育(分けつ発生)の停滞が見受けられ、一部では苗の活着や分けつの発生が緩慢となり、茎数不足への影響が心配されました。



【生育中期～出穂期】



6月下旬から徐々に気温が上昇して、30℃前後と暑い日が続きました。日照時間は少なく気温の日較差は小さくなり、また、降雨が多くなりました。7月に入っても気温は高く推移し、日照は多く降雨は平年並となりました。7日の定点生育調査では、草丈は急伸び平年より長く、茎数はかなり少なく、葉色はかなり濃い状況でした。要因として、夜温が高く茎数が少ない状況から、窒素養分の吸収増加により濃度が上昇したと推測されます。生育後半の倒伏や品質など、生育への影響が懸念されました。

【登熟期～収穫期】

8月以降に降雨が続き、特に9日から12日にかけては記録的な大雨となりました。管内でも、水田圃場の冠水などの被害が一部で発生しました。

気温は平年並で日照時間は少なく推移し、この時期では過去にない日照不足となったことで、籾の登熟におよぶ影響が非常に心配されました。刈り取り適期を迎えた9月16日以降、早刈りした圃場では籾の登熟の進捗が鈍く、籾の黄化も2次枝梗が青籾状態での収穫となり、「青未熟粒」や調整水分のばらつきなどが一部で見受けられました。9月後半以降は気温の上昇や日照時間が多く推移し、登熟も回復傾向となりました。

検査結果では異常気象の影響から「充実度不足」や「青未熟粒」、「胴割れ粒」などが見受けられ、1等米比率低下の要因となりました。収量は近年にない不作となり、管内の米の買い入れ状況は契約数量対比の87%となりました。



次年度に向けた取り組み

【土づくりによる気象変動に強い稲づくり】

●高温障害対策(ケイ酸資材の使用)

気象変動に対応する土づくりは、作柄だけでなく品質面での軽減にも繋がります。

ケイ酸質肥料は丈夫な茎や葉を作り、気象によるリスク障害や、「いもち病」などの病害虫の被害、割れ籾の発生と斑点米の被害などを軽減します。